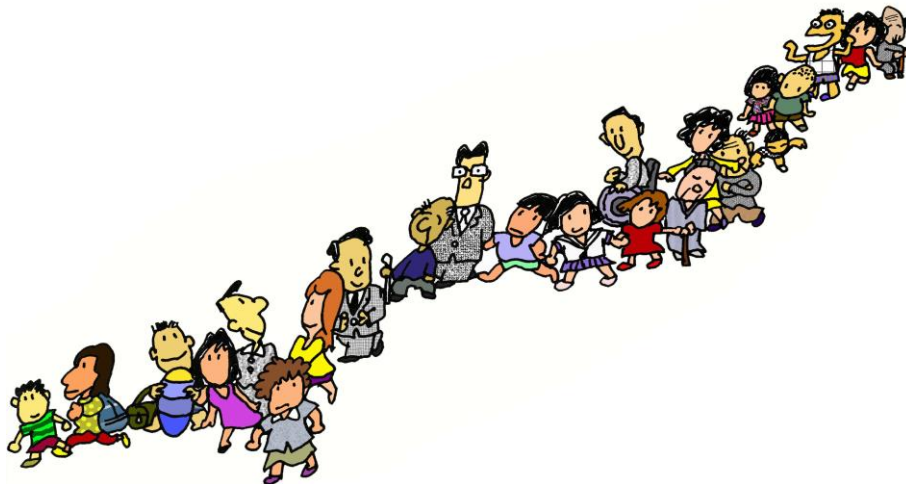


Family

History

(1)

団士郎（執筆）／団いどむ（調査）



私の家族にフィールドワークの得意な者がいた。次男のいどむだ。現在43歳、二人の子どもの父親で、妻と四人で芦屋市に住んでいる。大学を卒業する時、選択して証券マンになった。彼の就活は山一証券が破綻した年で、「この時期になぜ証券を希望するのか？」と面接でも聞かれたらしい。「こういう時期には、業界の様々な問題が洗い出されて、改革に動くだろうから、そこに興味がある」と言ったとか、言わなかったとか。いずれにせよ、大卒新入社員の7割以上が退職すると言われ、たくさん就職して離職する業界に自らの選択で進んだ。

その決断に至るとき、もう一つ取れていた内定話を聞かされた。どう考えても大手が倒産したばかりの業界より、まさに成長の一途をたどるであろう業種の大手。意見を聞かれればそちらを薦めただろうが、私は何も言わなかった。

そして大手証券会社に身を置いて、水が合ったというのか、めざましい活躍ぶりは、その企業のOGにあたる、私の友人の妻から、「社内報の記事で見たけど、息子さんご活躍やね」と伝聞で初めて聞かされた。そして10年経って退職した。どうするのかなとは思ったが、所帯も持っていた息子に何か言う筋もなかった。その後、外資系の証券会社で働くことになった。

退職にいたる経過はいろいろ聞いたが、基本的に本人の選択が第一に尊重されるモノだという私のスタンスは変

わらない。そして住まいも関東に移り、日本橋のオフィスで勤め始め、東京ディズニーランドの花火が毎日見えるマンションで家族4人暮らしていた。その後、異動で関西在住になって今に至っている。

いどむが高校生の頃のことだ。誕生日プレゼントの希望が「三國志人物事典」と聞かされたとき、「エッ？事典を読むのか？」と驚いた。いろいろ調べるのだと聞いたとき、私の物事へのかかわり方とは大いに異なった接方法の子なのだなと思った。

團家先祖代々

父や祖母が團家の事について、誇らしそうに語るのが私は嫌だった。どう考えても、自分は大したことをしているわけではない普通の人達だ。その口から、「團の家は士族の出やからな・・・」のフレーズが、私が子どもの頃しばしば飛び出した。活発なおばあちゃんだったし、面白い親父だったが、團家の話題は鬱陶しかった。

そういう出自、身分的なものに優越感を感じる人を私は毛嫌いしていた。根拠のない優位性を自慢するような在り方がうっとうしかった。今だって世間にはそういう感覚の人が少なくない。だからこの歳になっても、私の中には相変わらずそんな感覚がある。

考えてみるとこれは多分に、戦後民主教育を受けた産物でもあったと思う。人は皆平等、チャンスは公平に開かれているべきだという、やや過剰かとも思うが、基本的に間違っていない感覚に今もとらえられているのだろう。

しかし一方、それが理由で我が家の過去、歴史につながるものに全く関心を向けてこなかったのは、大した主張とも言えない。知らないだけだし、面倒くさがりなのだと言われればそうだ。

祖父母が亡くなっても、父母が亡くなっても、私はこの部分にあまり関心が持てなかった。

生前は不義理ばかりしておいて、亡くなったとたんには何か殊勝なことを言い出す下世話さを嫌悪している。「そんな気があるのなら、生きている内に工夫すれば良い！」と思うのだ。相手が死んでから、センチメンタルに自分のことを言いたいように意味づけている人を見るとウンザリする。

それは仏事にまで及んでいて、私世代の世間並みの法事と称される事への関与も我が家は少ない。自宅には昔からのそこそこのサイズの仏壇があり、位牌がいくつも収まっている。両親、祖父母、他にも誰か、あったかどうか、じっくり中を見たことがないので承知していない。

私が子どもの頃には年中行事だったお盆のお寺からのお参りも、途絶えて久しい。同じ大津市内に墓のある寺への寄進は口座振り込みでちゃんと済ませているが、訪れることも、経を読みに来て貰うことも少なくなった。

この青龍寺という曹洞宗の寺、実は私が幼い頃、育った場所だ。浜大津の湖岸沿いにあった自宅(父は召集されて不在で、祖父母と私の母の三人暮らし。私はまだ生まれていない)から、強制疎開で一家は、戦後しばらくこの寺の一室で暮らした。戦地からここに帰って、私を授かった両親と祖父母と暮らした。

その後、妹も生まれ、私の確かな記憶が生ずる前、その後の生活の場になる神出車路町の長屋に引っ越す事になった。

現在の我が家の不信心は、私達夫婦の合意の結果なのだが、とにかくそういう習慣に変更になって久しい。だからそもそも團家について、知らないことが多すぎる。それは團家に留まらず、私の母の出身家族である藤竹家に対してもそうだった。

早い時期に職業軍人を退役して銀行勤務だった(らしい)母方祖父。私の名付け親だと聞かされている祖父の葬儀に出たとき、私はまだ学齢前だった。とはいえ母方おじいちゃんの名前を、今回想い出そうとしても正確には知らなかったと

いうのは、いささか奇妙だが実際にそうなのだ。

両親も亡くなり、子ども達も皆独立して、今では妻と二人になったが、この家に引っ越してきたのは三〇年以上前。

大阪・高槻の、その後商店街と化した住宅地の古家から現住地に引っ越す時、一時的な仮住まい期間があったせいもあって、母はずいぶんたくさんものを捨てたようだ。もし、なんでも鑑定団のような発想があったら、押し入れにあったのをチラッと見た記憶のある箱に入った揃った焼物や、木箱入りの塗物の揃いは取り置いたかもしれない。しかし母はそういうことに執着がなかった。だから不要なもの、場所を占めそうなものはどんどん捨てた。

そしてごく一部残してあったのは、ちょっと捨てるわけにはいくまいというようなものだけだった。その中に、今はもう預けてしまったが、日本刀があった。私が子どもの頃、端午の節句には必ず金太郎の武者掛軸とこの刀が飾られた。

私の息子、特に次男(いどむ)がそれらに強い関心を持った。それまでも物置と化した我が家の一室に残されている小さな古道具の裏書きを見て関心を示したりしていた。

そんなわけで私のファミリーヒストリーは、NHKスタッフではなく、次男を調査員に長い旅に出ることになった。それは予想以上の時間と空間の旅になった。

ファミリーヒストリーの探し方

「家族カウンセリング」を主業務に長年、家族と関わってきた。家系図・ジェノグラムを扱うことも多く、私自身のそれも、聞き及ぶ範囲では知っていた。しかしそれ以上の、TV番組で有名人のルーツを探るような調査は、専門家がそれなりのノウハウを持って、様々な事実、出来事にたどり着いているのだろうと思っていた。

自分で探ろうなどとは思わなかった、その可能

性や、大変さに想像が及ばなかった。私は昔から宝探しが嫌いだ。潮干狩り程度の可能性があれば参加するが、それより曖昧な捜し物はしない。落とし物だって、私はなくした段階でほぼあきらめる。だから、そもそもこんな調査はしない。

そこで先ず、どうしてこんな調査をする気になったのか？どんな道筋で事実遭遇するのか、掘り起こされた膨大な資料をどう探し当てていったのかを調査員いどむに聞いてみた。

いどむへの聞き取り 第一回

「そのそも、なぜこんな事を始めたの？」

「興味本位に最近、初めて参加した伊吹の家(妻の実家／いどむには、母方祖父母)の集まり(若葉会という名の伊吹一族親類縁者の会)で、家系図なんかが好きの人が、家族史を書き残しているのを間近で見た。

その会で参加者からの近況挨拶の際に、伊吹文明(国会議員)さんの弟さんが、「我が家の歴史をいろいろ調べようとしたが、上世代の人にはもう聞こうにも聴けない。だから自分一人では限界がある。もし我が家のことでご存知のことがあったら、話して欲しいと語るのを聴いた。

その時は、こういう関心もありなのだなと思って聞いていた(この方も、それから二年も経たずに先日亡くなってしまった)。これらを通して、書き残しておかないと、聴けば分かる話も、他の者が調べようすると大変になるのだと思った。

團の家は、團というのも変わった名前前で、若狭國小浜藩の武士で、お殿様から拝領の刀があるとは聞いていた。だが、我が家にはそういうことに関心を持っている人は誰もいない。誰も調べたことがない。「よおーし！」と思った。

キーワード「きたしおやのせいがんじ」

地元大津の青龍寺の前に、福井県小浜市に先祖の墓があって、残したままになっていた墓じまいにおじいちゃんに行った話は「土郎さん」(私を子ども達は皆、こう呼んでいる)の思い出話として聞いた事があった。そこでいつも語られるのが「きたしおやのせいがんじ」。

寺の名前が分かっているのなら、今も変わらず同じ場所にあるだろうと思ってネットで調査した。もう一つはっきりしないところもあるが、ぶっつけで行ってみるかと思って、小浜の近所に用事があったときに「せいがんじ」を探しに行った。

しかしざ行ってみると、一地方都市であっても想像以上に寺の数が多く、しかも「せいがんじ」の漢字も不明で、もっと簡単に分かるやろうと思っていたのは外れた。

この時、探して、尋ね着いた「せいがんじ」は、誓う願う寺の誓願寺。ざっと市内の寺リストを二三回眺めたところ、「せいがんじ」と読めそうなのはここだけだった。この寺はネット検索でも出てきたのでそこに行った

「そこは、きたしおや ではないのか？」

「ちがう、小浜市内だけど。」

そこで、「他にせいがんじという名前の寺は小浜にないですか？」と尋ねたら、誓願寺自体、住職はおらず、他の寺と兼務の住職さんで、同じ浄土宗の寺だから、昔からの資料も引き継いだ、ここまで過去のことは詳しくない。

同じ小浜市内なら、そう広いところでもないが、「せいがんじ？」聞かないなあと言われたので、ないのかなあと思った。

それで2018年の春、京都の「ぼむ漫画展」期間中に会場に出かけて、土郎さんに確認をしたわけ。

ところが「きたしおやのせいがんじ」は間違いないという。ならば漢字を教えてくださいと言うと、「漢字は知らん」。でも、「きたしおやのせいがんじ」は間違っていないと言う。

こっちとしては、現地に行っても該当する寺はなかったから、勘違いしてるんじゃないかとかと思っていたが、そうではないと断言するので、結論としては、廃寺になっていたから、ネット検索しても出てこず、地元の人もなくなった寺などそんなに知らないのかなあと。

「その時さ、浄土宗だと言ったでしょう。ウチは禅宗、曹洞宗やんか」

「そうそう」

「それはなにかなかったん？」

「その事は、お寺さんにも聞いた」

すると、「それはおかしい。ウチじゃないんじゃないか？墓を移すときに、宗派を変えることはない」と。

でも、寺自体がないので、自分の中で、寺がなくなっているという想定がなかったので、どう調べようかなあ、もう少し手がかりがないと・・・

そこで考えたのが、移してきた大津／長等の青龍寺。こちらに記録があって、どこから来たかが分るんじゃないかと。

そこで、大津／青龍寺に行った。

「いったのか！」

「そこで今の住職の奥さんに、『団です。お世話になっています』と訪問主旨を告げた。

お墓を移されたのは三代上の住職の時になります。上世代なら記録の記憶も当たりがつくが、その上のお祖父さんの代のことは、私も見当がつかない。残ってる可能性はあるけれど、膨大な記録なので見つけれられる自信はない。住職にも聞いてみますが・・・、と言われた。

「一応お願いします」と依頼して終えた。

その後、電話連絡で、やっぱり分からなかったと返答があった。ああ、そういうものですかと電話を終えかけた時、向こうから、お宅のお仏壇に過去帳というのがあるはずだと言われた。

仏壇の中など探ったことがなかったのも、そういうものがあるのも知らなかった。そこには誰そ

れの死亡や、お寺の記録などがあつたりするから、一度調べてみられたらといわれた。

そこで「そんなことらしいわ！」と典ちゃん(いどむの母親／私の妻)に、仏壇あさってみても良いかと尋ねると、私も一緒に見ると言うので二人で探してみたら過去帳が出てきた。

そこには明治、大正とか、もっと前、天保とか書いてあつて。知らない名前がいっぱい書いてある。

「私も知らん」

そこで清厳寺の漢字が分かった。

「せいがんじで合ってた？」

「合ってた！」

で、あるのは分かったので、ネット検索してみるが、名前は出てくるが、情報が何もない。電話番号もない。住所と市内お寺一覧に名前だけ。

ネットマップで調べても、清厳寺が書いてある地図と、書いてない地図がある。

小浜市内で漢字も同じだから、おそらくここだろう。しかし〇〇％ではない。場所も小浜市北塩谷でもある。

この後どう当たりを付けようか、行くにしても確認してから行きたいと思った。そこで小浜市役所に電話した。

「我が家の墓のあつたお寺、北塩屋の清厳寺に連絡が取りたいが、ネットに電話番号もないので、状況を知りたいのですが」

すると係に回します、と繋いでくれて、「その寺は廃寺になっていて、住職はいらっしゃらない。近所の曹洞宗のお寺が管理している。連絡されるなら、そちらにされるのが良いと思いますと、寺の電話番号を教えてください。」

そこで電話をして、清厳寺の件ですがと尋ねた。すると、「はあはあ、任されてます。詳しくはないですが。小浜藩士の寺だったので、どんどん檀家さんが減って行って、だいぶ前に本堂が耐震基準の関係で危ない、何とかせなあかん。しかし改修費を出せるような檀家さんがもういない。建物を

放置しておくのは危険ということで、取り壊して更地にすることになって。今も、お墓はいくつか残っているけれど、お墓参りに見えているのも十戸くらいですかね。ほとんどいらっしゃらない。

昔、我が家の墓がそこにあつたんですが、その場所に立ち入るのはかまいませんか？

ああ、何もありませんけど、どうぞということ。

では、そこに今度行かせて貰おうと思います、ということになった。そんな感じで、ほぼ間違いなからうと。

ファミリーヒストリー ツアー

この調査報告会ツアーに、みんなを連れて行くのに、空振りではなんなので、他に調べられることはないかと思い、小浜藩士だったならと、ネットで調べていたら、藩士の調べ方というのがあつた。

そこには、小浜藩は長く酒井家が治めていたので、全八巻の小浜市史の中に、昔の武家について書かれたものがある。そこに藩士の名前一覧などがあるので調べたらよろしい。

そういう調べ方をネットに書いている人がある。なるほど、こういう関心で検索する人のために、書いてくれている方がいるのだなあと思った。

それで見てみたら、名前が載っていた。

「え、團の？」

それが家にあつた家系図に登場する名前と一致。和暦で書かれたものを西暦に治して、一覧をつくってみると、おおむね一致する。

下の名前まで書いてなくて、役職名で書かれたりもしているが合致する。

そこから家の歴史探索が始まった。

「こんなものがあつたのか？」

「家の仏壇にあつた」

これに関して以前、士郎さんは、明治の頃には家系図付きで家柄を売買したりがあつた。由緒あ

る家柄とか家系図なんて、たいがい嘘じゃと言っていた。確かにあの頃にはそういう話もあって、可能性はある。結論はわからんけど。

ただ、そういうさんくさい商売モノの家系図だったら、こんなに小浜藩史に出てくる細かい事実と、きっちり合ってなくても良いだろうと思った。だから一定信頼できるのではないかと思う。他から出てくる事実のと符合度も高い。

小浜市史に載っているものだけだと、それを作った時に、各家に資料提供を求めた可能性はあるから、それで出したら一致するのは当たり前という可能性もある。

清厳寺、仏壇の過去帳、家系図、そして小浜市史が現在の到達点。

ちなみに、家にある家系図をどうやってつくったのかを見てみると、その前の家系図がある。

それがこれ。一〇〇年前につくっているが読めない。ぼろぼろになっていて、それを作り直してくれている。それは團雄二郎さんというひとが作っている。そこに、五士郎(士郎の父)が付け加えている。そこらあたりまでは、関心を持っていたと言うこと。

それが誰も関心を持たなくなって、ほったらかしだったのを今、掘げて見ていることになる。そこから明らかにしたのがこれ。

「そうかあ。なるほどなあ。モノを調べるのって、何を調べるのかが分かっている資料をあたるのは出来るけど、行ってみて名前が違うとか、ないのかなと、そこでお前は、粘れるんやね。

私はあかんは、なんや、ないのかと思ってあきらめてしまうなあ。宝探しって、一番苦手や」

「確かに宝探しやけど、そこになんかことが分かったら、無駄やったと思うんじゃないって、その事が分かったと思うから。他を探せば良いんだと思う。徳川埋蔵金みたいなもんや」

「なるほどなあ。信じられんは、絶対、私はようやらん。体質の問題か？」

「過去帳が大きいな。これがなかったら、先の展

開が見えにくかったやろうな。一緒に家の由緒書きが残っていたのも大きいな。それに、家に残ってなくても、探せるのは、名前が珍しいとか、何かそれなりの有名なモノが含まれていることやね。藤竹(士郎の母の実家)の家は、陸軍関係で検索できる。ネットで紳士録が明治の頭くらいから定期的に出ている。

兵籍簿

次男の調査がきっかけではあるが、同時並行的に私の中に潜在していた関心が動き始めた。それは兵籍簿というものの存在だ。

私の父は中国で終戦を迎え、帰国するのに一年以上待って戻ってきたとは聞いていた。そこは中国内陸部の都市で、敗戦後の軍隊の食料調達はなかなか大変だったと聞いた記憶があった。

太平洋戦争末期に召集され、出征した父の軍隊話を、まとめて聞いたことはなかった。私が聞くとしなかった記憶もないが、関心を持って聞くとしたこともなかった。だから話さなかったのかもしれない。

同世代の叔父や叔母達とは、面白昔話風に当時の事を語りあっていたが、あまりの笑い話にどこまで本当のことなのか？と疑っていた。

どんな昔話も丸ごと信じられることはなく、人には語ること、語らないことがあるだろうと思っていた。歴史を個人が語る時に起きる記憶違いや、無意識的修正なども承知している。

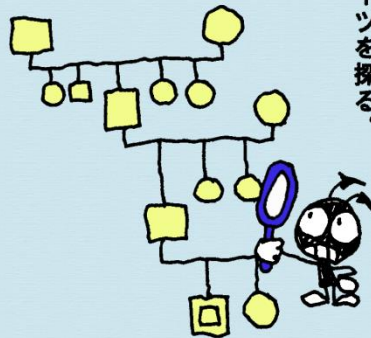
そんな父の軍隊生活に関心を向けることになったのは、兵籍簿というものの存在を知ったところからだ。そしてその時、父はもう亡くなっていた。父自身もみたことはなかったに違いない兵籍簿。今にして思うが、これを見ながら話が聞けたら、どんな昔語りになったのだろうか。

木陰の物語「Family History(兵籍簿)」

←start

NHKのテレビ番組が話題だ。

家族のルーツを探る。



本人も知らなかった、
家族の歴史をさかのぼる。



Family History

木陰の物語



団 士郎

様々な歴史的事実之初めて
ご本人が触れることになる。



「知らなかった、
そんな話は
誰も教えて
くれなかった」



苦しくも、ときに感動的な
物語が発掘されることがある。



これは、たまたま日本だけで、
のことではない。



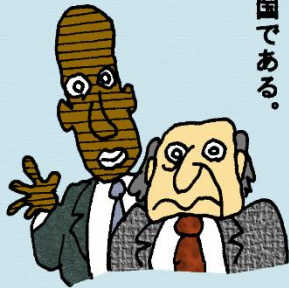
数年前、ある調査でロンドンに行った時のことだ。国立公文書館を訪ねた。



そこでは多くの一般の市民が、自分のルーツを探して古文書をひもといていた。



移民の多い国である。



教会などに保管された自分の出生記録を、系統的に家系図に書き起こすことがブームになっていた。



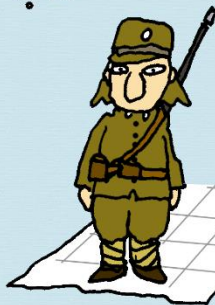
私は最近、ちょっとしたきっかけで、兵籍簿というものを知った。



記録?



先の戦争の時、軍務についた者の記録が、各都道府県庁に保管されている。



配偶者、子、孫などの身近な人間が、自分の父親や祖父の戦争中の動きについて資料提供を受けることができる。



子どもの頃、昔話として戦争のことを少しは聞いたことがある。



しかし日本史の1ページとして、軍隊の行動のことなど知らない。



一市民の父が、兵隊として
どう動くことになったのか、
知りたいと思った。



県のHPをみて
電話で問い合わせ、
兵籍簿の閲覧
申請手続きをした。



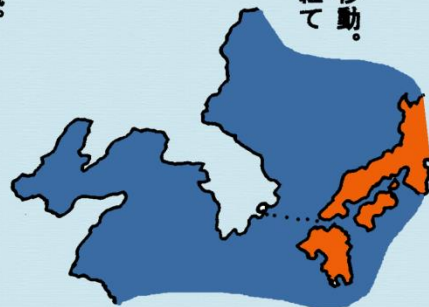
確認の存在
私の兵籍簿
Telで存在の確認

三週間ほどで返信が届いた。



海軍は
厚生省が省に?

昭和19年の
応召から入隊、
朝鮮半島への移動、
そして満州を経て
中国への進軍。



長江沿いの
街で迎えた終戦。

1年後、浦賀港に戻って
来るまでの行動記録。

20	3	22	一等兵	武昌陸軍病院入院
5	6			退院
同日	8			江蘇省陸軍病院入院
9	14			停戦詔書発布
21	6	15		内地帰還要請発表
7	6			上海省陸軍病院
7	12			満洲

体が弱く、
丙種合格で
終戦間近の
召集だったと
言っていた通り、
配属早々の入院。



そして退院。
転属、また入院。

麻酔がないぞ!



父から聞いていた通りの、
病院生活の繰り返しで、
終戦を迎えている。



そこから帰還船に
乗るまで一年間、
敗戦地での生活。

昭和21年7月6日、
上海港を出て、

13日に
浦賀港上陸。

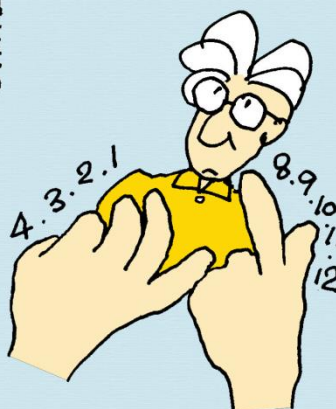


昭和21年7月15日、
召集解除とある。



私の誕生日は、ベビーブームと
呼ばれた昭和22年5月20日。

父が帰国して
10ヶ月と
7日後で
あることを、
初めて知った。



団塊世代の
同級生達は
みんなこんな
日本史を
背負っている。



あなたのお父さん、あるいは
お祖父さんの兵籍簿も多分、
保管されている。



こんな時代である。
我が子のことを
思いながら、
父や祖父の
生きた歴史に
目を向けてみるのも
興味深いのでは
ないだろうか？



まずは県のホームページで
兵籍簿についての検索から、

我が家のFamily Historyを！



おわりに

終戦後、地理的關係だろう、シベリア抑留はされなかったが、中国内陸部に残され、戻ってくるのに1年近くかかった父の中国での足跡が兵籍簿を照会する事で明らかになった。

召集を受けて日本陸軍に属したことがある者は、基本的にその応召以降の足跡が、時系列で記録され、除隊に至るまでの経過が記録として残されている。記録の緻密さたるや、本人の記憶よりも正確なのでは？と思うほどである。

兵籍簿は資料請求手続きによって、本人、子、孫など親族に開示される。陸軍所属は各都道府県庁が、海軍所属は厚生労働省が保管していると聞いた。(私の親族に海軍はいない)

赤紙で召集された日本人の多くが陸軍に属していたから、その子孫である私たちは、召集されたときの本人の本籍地都道府県庁所管部署に問い合わせれば、先ずその記録の存在有無を確認できる。

私の場合、滋賀県庁の代表番号に電話した。用向きを話すとすぐ、該当係に繋いでくれた。多くはないがコンスタントにある照会のようで、丁寧に事情を聞いて説明してくれた。

父の名前、当時の本籍地、私との続柄などを問われるままに電話で話した。当時の父の本籍はうろ覚えだったが、おそらくそこだろうという話し方をした。最近、NHKTV番組「ファミリーヒストリー」の影響もあってか、対応も手馴れたものだった。

そして、いくつかのやりとりで、父の兵籍簿が存在することが確認できた。後はそれを踏まえて、正式に資料請求手続きをすれば良い。滋賀県のホームページには、その請求用紙がアップされている。ダウンロードして記入し、明示された宛先に郵送すれば、二、三週間で届くとあった。わざわざ出向いて手続きすることもないのである。

わかれば簡単だ。すぐに請求すれば良いのだ

が、まだ少し躊躇う気持ちが消えなかった。

理由を考えてみるに、このようなものを開示請求すると、そこにどのようなことが書かれているのか。ひょっとして父が明らかにしたくなかったこととか、話したくなかったような記録に遭遇する可能性も否定できない。それは息子である自分にとっても脅威である。

だからパンドラの箱なのだ。実は兵籍簿そのものの存在を知ったのも、関心を持ったのも、最近のことではない。だが、なかなか取り寄せてみるという行動に移すには時間がかかっていた。

戦後日本の学校教育が、日本史で聖徳太子の時代や、豊臣秀吉の話ばかりしている内に、近代史に突入直前で学年末になってしまうのは、義務教育の未必の故意的なものだろうと、ずいぶん後になってから思うようになった。

もし、近代史をきちんと教えるつもりなら、新しいところから歴史を遡ってゆけば良い。授業時間の関係で大和朝廷や弥生以前は自習して置いてくださいになってもかまわない。

明治以降を司馬遼太郎、等の小説家まかせなのは、いかがなものか。坂本龍馬の武勇伝を楽しんでいる分には、自分の歴史とはつながってこない。

兵籍簿には私に直結する近代史が記録されていることになる。日本の近代に目を向けるという事は、自分の家族史を抜きにはできないのだろう。